

『今昔物語集』と女性

——〈男と渡り合う女〉たち——

〈今昔的〉な女性、今昔物語集という作品の個性に見あった女性とはどのように描かれた女性のことなのだろう。この作品はまことに多様な話題を語っているのだから、かようにいくぶん乱暴な問い掛けには読む側の関心の持ち方に応じて様々な回答が寄せられることになるに相違ないのだが、それでもなお、たとえば次のような話は我々の〈今昔の女性〉像形成の核ないしはそれに近い位置を占めているものではないだろうか。

- 人に知られぬ女盗人の語（二九三）
 - 妻を具して丹波国に行く男、大江山にして縛らるる語（二九二三）
 - 平定文、本院侍従を仮借する語（三〇一）
- 三十歳余りの赤鬚の侍を魅了し、「烏帽子ヲシ水旱袴ヲ着テ、引編テ、管ヲ以テ男ノ背ヲ櫂ニ八十度打」って盗賊に仕立て上げた女盗人。道連れになった男に夫の前で犯されながらも悪びれず、かような事態を招いた夫に「汝ガ心云フ甲斐無シ。今日ヨリ後モ此ノ心ニテハ更ニ墓々シキ事不有ジ」と論して自らの生国丹波への旅を夫と

竹村信治

ともにした妻。そして平中を翻弄しつつ、しかも男を「何デカ此人ニ不会デハ止ナム」と思い死にさせた本院侍従。いずれも芥川龍之介（『偷盗』『藪の中』『好色』）ほか何人かの近代作家が取材した著名な話題である。その意味ではかような話題に〈今昔の女性〉をイメージする我々の視線が近代の文学作品によって少し歪められているともいえそうだが、しかし一方で、

- 碁檯ちの寛連、碁檯ちの女に値ふ語（二四六）
 - 女、医師の家にきて瘡を治して逃ぐる語（二四八）
 - 延喜の御屏風に伊勢御息所、和歌を読む語（二四三）
 - 近衛の舎人共稻荷に詣で、重方、女に値ふ語（二八一）
- の〈愛敬づきたる〉女性たち、また力で男を打ち負かす女性群（二一七・一八・二四）、あるいは「藤原明衡朝臣、若き時、女の許に行く語」（二六四）の下衆の妻（恋人との逢瀬に宿を借りた明衡を密男と誤った夫が浮気の現場を押さえようと踏み込んだ折、それと知りつつわざと「盗人か」と騒ぎ立てて恥をかかせる）や密男を思っ

夫の殺害を企てるしたたかな女たち(二四14、二九13・14)などを重ねていけば、〈女盗人〉以下の話題は近代作家のかぶせたフィリターを除いてもなお〈今昔の女性〉像の一つの形を伝え、我々のイメージ形成の核とするに足るものであることが了解されるであろう。言葉を発し自ら動き、男に働き掛け渡り合い、策謀をめぐらしてこれを圧倒する女性。そこに見出される女性の姿はおよそこのよりなものだが、その際立った身体性は話題性と相俟つてこの世に自らの生を営んだ個性を感じさせ、物語中の男たちにとどまらず読者をも圧倒して、確かに〈今昔の女性〉と認めさせるものとなっているように思う。

ところで、かような身体性を伴った女性を描く話題に注目し、そこに〈今昔の女性〉像の核のようなものを見ようとする我々の判断は、少しこれを対象化して観察すれば明らかのように、内外面の輪郭が迫りにくく身体性を伴わないものとしてイメージされる平安朝物語文芸の女性像との対比に基づいている。この対比は近代における今昔評価(「王朝の裏面」「野性の美」「生ま生ましさ」「驚きの文学」「行動の文学」「中世文学の先駆」等々)の影響下にあるもので、このような観点にたつ作品理解は、作品独自の文学方法や組織構成、更に表現世界の構築性や翻訳論としての表現論、言語行為についての議論へと進む研究史を経た現在も、未だ十分に相対化されたとは言いがたい。したがって今昔には「六の宮の姫君の夫、出家の語」(一九五)「人妻、死にて後に本の形となりて旧夫に会ひし語」(二七24)などの〈待つ女〉の話題あるいは二人妻話型の歌徳説話

(二〇10・11・12)など物語的な説話も多いのだが、それらは〈今昔的〉なる話題として取り上げられることが少なく、専ら王朝物語とは対照的な躍動する生を描いた説話が今昔の顔となっているのである。この結果〈今昔の女性〉もそのような女性たちが代表の座を競うこととなる。つまり、先に示した女性たちはこのような作品理解に連なって我々の〈今昔の女性〉像形成の核に位置を占めていたと知るべきだろう。それにしても、彼女たちは本当に今昔の個性に見あった女性といえるのだろうか。

*

今昔が彼女たちに関心を寄せていたことは疑いない。それは収載の事実、語り口、配列位置(二八1、三〇1、三一1)などに明らかである。あるいは語末の「変化ノ者」(二九3、二四6)「極ク賢カリケル女」(二四8)との評に、話題に引き込まれた表現主体の驚きの表情を確認することもできるだろう。しかしまた、今昔が驚いているばかりでなかったことも確かなことだ。たとえば、平中本院侍従の恋の攻防譚(三〇1)の語末の場合。

然レバ「女ニハ強ニ心ヲ不染マジキ也」トゾ世ノ人誘ケルト
ナム語タリ伝ヘタルトヤ。(同話宇治拾遺物語50にはなし)

これは平中思い死の結末から導かれた評語だが、かような教訓は物語が語ってきた恋の攻防の興趣を霧散させる。つまり、今昔は出来事の因果を了解しようとして話題を自らの認識の範疇に取り込め、結果、物語の描く本院侍従の個性を塗り潰していくのである。

「女ニハ強ニ心ヲ不染マジキ也」は、女性の（魔）性を説く発心集四6以下などを見ればすぐに了解されたとおり、仏教的な女性観を背景にもった言辭である。釈迦の託胎をもって作品を始め三國の仏法流伝史を構想する今昔が仏教的な認識に基礎付けられていることはいうまでもないことだが、女性観もまたこれに枠取られていた。

長業寺僧の読経の声に愛欲の心をおこした入定の尼を語って「入定ノ尼ソラ如此シ。何況ヤ世間ニ有ル女ノ罪何許ナルラム」と説く一三12。法華経提婆達多品の龍女變成男子にかかわる話題一三43、一四4。「女人ノ惡心ノ猛キ事既ニ如此シ。此ニ依テ女ニ近付ク事ヲ仏強ニ誡メ給フ。此ヲ知テ可止キ也」と結ぶ「紀伊國の道成寺の僧、法華経を写して蛇を救う語」(一四3)。その他「然レバ女ノ賢キハ弊キ事也ケリ」(二七13)。「然レバ女ノ心ハ怖シキ者也」(二七20)の話末評、あるいは一話中に見える「人ニ男女有り、而ルニ男ト生レタル、此ニノ樂也」(一〇10)。「汝ガ其ノ経ヲ書トテ……女人トモ触バヒテ心ニモ女ノ事ヲ思テ書キ奉リシニ依テ其ノ功德ニ不叶ズシテ」(一四29)の記事。

今昔は、説かれるように、女性の淫乱さ、愚かさ、罪深さを繰り返して語る(平雅行氏「中世女性と仏教」平成二6)。愚かな衆生への今昔の視線は男にもひとしく向けられており、作品はいわば「愛念の衆生」をこそ描き出そうとしたというべきだが、しかしなお、九想観を思わせる一九2・10の記事、女性の貞操を称揚した一六18、三〇13の話題、己の病の治療のために児肝を求める平貞盛が妊娠六ヶ月の御炊みくひの女の腹を開いた拳句に胎児が女子であったとして捨てた

ことを平然と語る二九25、更には嫉妬を「女ノ常ノ習トハ云ヒ乍」(二七22)「女ノ事トハ云乍」(三二10)と前置きして言い、女性の行為を褒める際に「女ナレドモ」(一七33、二八14)と言ひ添える語り口、「女ノ心ハ奇異ク怖シキ」(二六5)の発言などに眼をとどめるならば、「元来は僧侶に戒律を守らせるためにことさらに女性を誹謗したさまざまな仏教的観念」「女性蔑視観」(平氏同)が、根深くまた広範に横たわっているといわざるをえないだろう。

平中本院侍従の物語への今昔評はかような今昔の女性観に根差している。「存在としての女人罪業観」に立ち、出来事の悪因を女性に帰せしめて了解する今昔。同様の事例は発心集四6にも示される浄蔵と近江守娘との話題(三〇3)にも見出され、ここでは「女御ニ奉ラム」との親の期待を台無しにした浄蔵を語りながら、今昔は此レハ女ノ心ノ極テ慥まことキ也。浄蔵心ヲ尽シテ云フトモ、女ノ不用ザラムニハ不可叶ズ。然レバ心柄こころがた女ノ身ヲ徒いとがらニ成ツル也トゾ、世ノ人云あつた線せんケル、

と評する。また法華経書写に際して「善知識ノ為ニ淨キ水ヲ以テ此経ヲ書ク墨ニ加」えた女に経師が「愛欲ノ心」を發して背後より「婚」いだ結果そのままの姿勢で二人とも急死したと語る一四26では、話末に

亦、経師其ノ心ヲ発スト云フトモ女忽ニ不可承引ズ。寺ヲ穢シ経ヲ不信ズシテ現ニ罪ヲ蒙レリ。

と加えられる。悪意に満ちた視線とまでは言わぬにしても、仏教的な女性観に呪縛されたとしてもいえそうな、いくぶん偏狭な話題理解

のすがたをここに指摘することはできるだろう。そして、この偏狭さは「言葉を發し自ら動き、男に働き掛け渡り合い、策謀をめぐらしてこれを圧倒する女性」「身体性をもって躍動する生」を受容したとする今昔像との間にいくらかの懸隔をみせかけてもいる。

*

女人不淨觀にたつ差別的で偏狭な女性観と男を圧倒する個性的な生の躍動に寄せる関心との懸隔。しかし、そのいづれかを「今昔的」なるものと規定しようとするれば今昔の個性を見誤ることになるだろう。際立つた身体性をともなうて描かれる女性の多くは「変化ノ者」「人ニハ非ザリケリ」といった言辞で評される。これは話題の女性を自らの認識の範疇に取り込め秩序化しようとした今昔がそれを諦め放擲して示した評言と見るべきもの。そこでは、固定觀念とでもいえそうな偏狭な今昔の女性観が、眼前の躍動する個性に圧倒され揺り返されているのである。

今昔物語集は説話の編成に作品世界を構築しそこに一つの表現を實現しようとした作品だが、用いられる話題は直接見聞に基づいたものが殆ど無く、既に書記資料に収載された話題に取材し本文をこれに依拠したものであったことが近年の研究によって明らかになっている。収集された話題はまことに多岐にわたる。今昔は構想に即してそれらを秩序化するなかで、逆に多様な話題との出会いに自らの認識を揺さぶられ続けたことだろう。「変化ノ者」「人ニハ非ザリケリ」の評言もそのような出会いに戸惑う今昔の驚きの表情を伝

えたものと見なしうる。

男を圧倒する個性的な女性の生の躍動を語る話題、それがどのような世界で形成されたものかはわからない。けれども、今かりに「女盗人」以下の女性たちの属性を比較の便宜上あえて「男と渡り合う女」と一面的に概括するならば、そのような女性は古典世界にいくらかでも見出すことができる。嫉妬して仁徳帝の召す女性を悉く退去させた石之目売命、この頼りにならぬ仁徳帝の求婚を拒否し使者速総別王に自ら身を委ねて嘸き掛け帝への反逆を促した女鳥王（古事記）。「待つ女」衣通姫をめぐって允恭帝と渡り合う忍坂大中姫（日本書紀）。遍昭に戯れて歌を詠み掛ける小野小町（後撰集・大和物語）。また天徳四年内裏歌合は殿上侍臣の鬨詩に対抗して典侍命婦たちが女性のための歌合開催を願い出て實現したもの。女四宮歌合（天禄三）は「男女房わきて」の歌合で、十訓抄（一一二）にも男性側が判者源順の女性方加担を非難したことが見えるように、それは男女の風雅なあらがいが演出された企画であった。公任の軽口に「源氏因るべき人も見え給はぬに」と心中で応じた紫式部（紫式部日記絵詞）、中宮行啓の折「すきずきしきわさ」に及んだ生昌を同僚女房とともに笑いものにした清女（枕草子）なども「男と渡り合う女」として容易に思い起こされるところだろう。今昔に近いところでは、高陽院七番歌合（寛治八）が女四宮歌合同様「を」とこ女の時の歌詠をえらびて」の企画。そこでは伯母（康資王母筑前）が判者経信にかみついている。男女の風雅なあらがいを演出する企画には堀河院艶書合（康和四閏五）もあった。

如上は思い浮かぶままに列挙したまでだが、こうして女は男と渡り合ってきた。無名草子で「女のいまだ集など撰ぶことなきこそいと口惜しけれ」との不満が漏らされるのも、またこれに対して「物語ども、多くは女のしわざに待らずや。されば、なほ捨てがたきものにて我ながら待り」と女性であることを誇るのも、かような男と渡り合った女の歴史を顧みてのことに相違ない。まことに女は多くの物語を産み落とした。彼女たちは女の生を見つめ、そこに立って男を賞賛し笑い指弾し批評しながら物語を語りあげつらう。「見しはみな昔の夢となりはててあらぬ命ぞいきてかひなき」とは女御となった「在明の別れ」の女君が男装の頃を回想した際の詠歌だが、かようにして彼女たちは男装の女主人公に夢を託す（とりかへばや?）に至る。

確かめておきたいのは、男と渡り合った女の歴史があったこと、また渡り合い観察し批評しつつ自らの境涯を嘆きまた夢見る女たちの世界があったこと、そしてそれ故に「男と渡り合う女」たちへの関心は特に文芸の世界において成熟していたと見られること。今昔はかような関心に支えられて形成された話題と出会い、引き込まれて驚き、そしてその偏狭な女性観を動揺させているのである。

*

以上、「今昔の女性」について、対立的な二様の像を取り上げ、両者の関係付けを作品形成の様態にそくして試みた。ところで、如上の「男と渡り合う女」たちは今昔の偏狭な女性観

を掻きぶりながらもついに認識の深化を導かなかったようだが、今少し影響力をもった女性はこの作品に見出せないわけではない。たとえば次の女性。

●山城国の女人、観音の助けに依りて蛇の難を通る語（一六六）
蟹満多寺縁起として著名なこの話題の結びには「此レヲ思ニ彼ノ家ノ娘糸只者、ニハ非ズトゾ思ユル」とある。「只者ニハ非ズ」とは観音経読誦者、法華経持者である女性の慈悲篤信の業を賞賛した言辭。同様の例は「尼願西の持てる所の法華経焼け給はざる語」（一二三〇）の安養尼についても見出される。また篤信の女性を称揚する話題には「貧しき女、仏の助けに依りて富貴を得し語」（一二一五）「利荆女、心経を誦して冥途より返る語」（一四三）などもある。蟹満多寺の話題は法華経験記によるが同類語は日本靈異記にも見え、その女性像は古く遡る。一二一五、一四三も靈異記からの話題である。女性罪業観の定着は十世紀頃で靈異記には差別観が見えないとする指摘（平氏同）にしたがえば、今昔はそのような達人的宗教者としての女性を描く古の話題と出会い、驚きの声をあげ、ここでも自らの女性観を動揺させていることにならう。仏道上で「男と渡り合う女」の発見。そして「源信僧都ノ婦」安養尼は「女ノ身也ト云ヘドモ心ニ智有テ因果ヲ知レリ」と紹介される。これは差別観の表れであるとともにそれによって覆えない女性の存在を認めたとの。今昔はこうして自身の女性観を相対化し組み立て直しつつ、新たな女の物語を作品に呑み込んでいくのである。

〔たけむら・しんじ 福岡女子大学助教授〕